様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６４７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１７７３

研究課題名（和文）多職種協働による芸術保育を主軸とした日常保育実践モデルの開発

研究課題名（英文）The development of an everyday childcare practice model centered on artistic childcare services via multidisciplinary collaboration

研究代表者
保坂　遊（HOSAKA, Yu）

東京家政大学・子ども学部・准教授

研究者番号：９０４２３９９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、臨床美術士が保育現場に常駐し、芸術表現活動を主体とした子どもの豊かな感性の伸長、保育内容の質的向上を目的として、保育士、研究者らとの協働により実践された。
プログラム開発にあたり、研究者らは、造形表現技法ごとに発達段階を踏まえた計画を立て、活動を長期的、俯瞰的な視点から構成した。段階的・周期的な課題によって、子どもの表現力を高め、より主体的で能動的な表現活動へと結びついた。
また、各園では、専門職者の介入により保育の質の向上や保育士のスキルアップにも影響を与え、日々の活動や行事のための協働や、子どもが自主的に活動できるようなコーナー保育の環境づくり等へと有機的に発展した。

研究成果の概要（英文）：In this study, Clinical Artists were placed at nursery schools. A program aimed at fostering the children’s rich sensitivities based on artistic expression activities and improving the quality of nursing care was run, with collaboration between nursery workers and researchers.
In developing the program, researchers made a plan for each formative expression with consideration for the developmental stages, structuring the activities from a long-term and comprehensive perspective. The staged and periodic tasks heightened children’s expression capabilities, leading to more independent and active expressive activities.
Intervention by specialists improved the quality of nursing care at each school and also affected nursery worker improving their skills. It has developed into collaboration for daily activities and events, and a childcare environment with corners where children can act independently.

研究分野：子ども学（造形表現）　臨床美術

キーワード：多職種協働　日常的保育内容　造形表現　臨床美術

１．研究開始当初の背景

昨今、保育を取り巻く様々な問題の中で、保育の質の向上や保育者の専門性についての議論が高まっている。しかし、保育現場では煩雑過多な業務に追われ、本来の保育専門職としての子どもの援助と理解について十分な労力を充当することの難しさが指摘されている。日常的な保育内容において活動の中核をなすものは遊びを中心とした「表現」領域であり、子どもはこれらの豊かな体験を通して感性基盤を形成することから、保育者がどのような援助を計画、実践、反省し、子どもの主体性や発達に沿った保育の道筋を立てることができるかが重要となる。

また、近年、専門職者との協働的保育実践の諸外国の事例なども注目され、芸術的アプローチによる保育実践への関心も高まっている。子どもの感性をいかに伸長させるかという点において、日常的支援者である保育者のほかに、様々な芸術分野での専門者が保育活動へ携わることの効果も期待されるところである。更には、臨床美術という、対人援助プログラムが、近年、教育や福祉現場に「表現活動の社会化」という新たな視点持って、導入されており、臨床美術アプローチの教育的意義について理解が広がっている。これらの事は保育内容へ新たな示唆を与え、質向上に貢献できるのではないかと考える本研究の背景である。

２．研究の目的

本研究は、保育における質的課題に対して保育内容の充実や向上を図るために、表現活動を主軸とした多職種協働による組織的な保育活動実践により、保育専門職が成長・熟達化する為の一モデルを示すことを目的とする。具体的計画として、保育活動の中核である領域［表現］を中心として、保育者と表現活動支援に特化した専門職者（臨床美術士）との日常的協働により、感性を伸長する芸術保育活動を実践し、日々の子どもの気づきや発見、興味・関心事をより深い表現活動へと展開できる保育実践モデルの開発を行う。また多職種協働による様々なアプローチからの保育計画立案・教材研究、実践、省察といった PDCA サイクルを検討しながら、保育の新たな有機的展開・発展、人的/物的環境の充実、表現領域のフレームシフトへの示唆を提言する。

３．研究の方法

本研究は3カ年計画（平成27-29年度）で実施した。平成27年度は臨床美術アプローチ を応用した芸術保育実践のためのプログラム開発を行い、子どもの発達に沿った表現活動の意義付けや具体的方法論を構築する。これらをもとに、研究協力保育施設での保育士と臨床美術士による日常的芸術保育ロールモデルのプレ実践検証を実施した。平成28年度では、前年度の実践から得た知見より、年間を通した保育実践検証を行い、芸術保育実践の為のプログラム検証、協働によるPDCAサイクルの構築を図る。平成29年度は、協力施設数を拡充し、導入モデルの妥当性や汎用性について検討を行う。現場実践検証を引き続き行いながら、年度末にはこれまでの保育実践をまとめ、広く公に研究成果を示す。

４．研究成果

（１）平成 27 年度（1 年目）

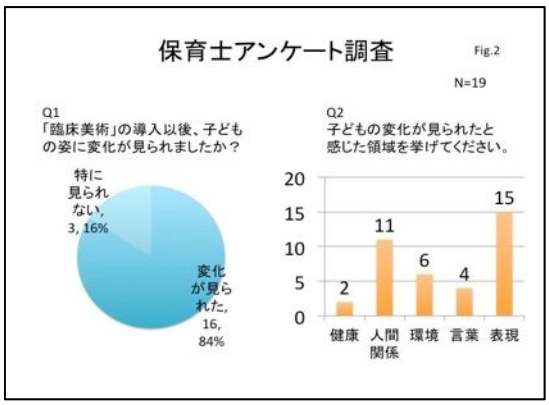
本取り組みにあたり、社会福祉法人 S 会内３施設（東京都）、及び K 保育所（埼玉県）の計 4 施設の協力を得て、H27 年 4 月より臨床美術士が各園に常勤的に雇用され、日常的保育業務や事務業務の補助を担当しつつ、主に 3 歳児～5 歳児に対して月に 3 回程度の表現活動実践を行った(Fig.1)。実践内容は、研究者らが臨床美術の方法論を生かして子どもの感性や創造力の育成を目的とした新たなプログラムを開発し、各月ごとの保育目的に沿って実施した。また臨床美術の特色である「鑑賞会」を制作後に毎回実施し、各幼児の作品表現を十分に褒め自己肯定感を高めるとともに、他児の表現の魅力を認め合う心を養う場を設定した。年度末には、子どもの変容の有無について、担任保育士アンケートによって調査した。変化が見られたとの回答は 84.2%（n＝19）であり、変化の内容については 5 領域別に挙げられた(Fig.2)。表現活動の質の向上についての記述が特に多かったが、自他を評価しあう心が芽生えた「人間関係」や、周りのものへの興味や関心が高まった「環境」領域の指摘も見られた。

研究初年度である H27 年度は試行期間であり、研究者らの考案した造形表現プログラムを臨床美術士が各園で実施し、省察していく仕組み作りとなった。保育現場へ臨床美術士が造形表現活動と保育補助という日常的な関わりを持ちながら保育士と協働していくことで、「表現活動の質的向上」、「子どもの姿の変容」、「保育士への刺激」、「保育業務の援助」等、保育現場の現状に対して多くの効果を与えうる可能性が示唆された。煩雑な保

育業務内で双方の十分なディスカッションの機会を設ける必要など更なる課題もあるが、保育内容の充実に向けた一アプローチとして、次年度への継続的な取り組みへの基盤づくりとなった。

Fig.1 年間の造形表現活動のテーマおよびねらい

月	テーマ	ねらい
4 月	オイルパステルによる色彩あそび	基本画材オイルパステルによる様々な表現方法と出会い、開放感のある活動の中で、感覚的な色彩表現に対するイメージを豊かにする
5 月	自然環境と表現のつながり	４月の色彩表現を発展させる。自然物や天候などから刺激を受けながら、オイルパステルでの表現の幅を広げていく。
6 月	絵の具と触れる	水彩絵の具の魅力を様々な技法を使いながら感じていく。水で溶いた絵の具が混色されて変化する美しさの中で、季節に沿った表現を重ねていく。
7 月	ハサミやノリ貼りによる平面構成	ハサミやノリを使いながら、紙素材での表現方法を様々な技法を使って体験する。また平面構成をする中から想像を膨らまし、見立てる楽しさを見つける。
8 月	五感と色彩	夏の季節感を感じ、プールなど水遊びが多くなる保育活動との関連を考慮しながら表現活動へ結びつけていく。
9 月	秋の豊かさ	季節の移り変わりを意識しながら、秋の環境や実り、美しさを感じ、それぞれの表現活動へ展開していく。
10 月	秋の実り	園内外での体験や、行事などとの関連をきっかけとして、実感を表現へと反映していくことができるよう、一歩踏み込んで制作していく楽しみを知る。
11 月	カタチや量を感じて表現しよう	これまでの様々な表現手法の体験を活かしながら、自然物の魅力に気づく観察力や想像力を育む視点によって、各々の表現世界を伸長していく。
12 月	版画あれこれ	版画の面白さ（版と転写）を感じる事をテーマに、年末の行事に関わる表現活動を行う事で、生活に魅力を与えるアートの豊かさを実感する。
1 月	新年と節分	年始にふさわしい表現活動の体験を楽しむ。また冬の季節が本番を迎え、様々な視点からの感覚的な表現を体験する。
2 月	粘土	粘土に触れる体験を通して、触感、素材感、塊で表現していくことの魅力を体験する。
3 月	総合表現	年度末の総合表現として、１年間過ごしてきた友達とコミュニケーションを図りながら、共同制作によって大きな表現が可能になる達成感を味わう。

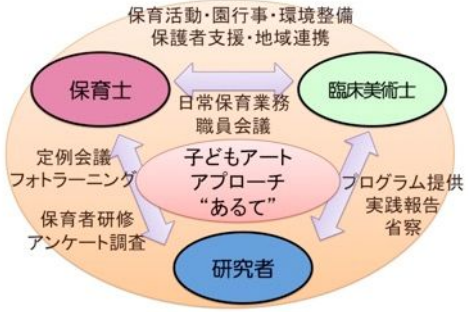


（2）平成 28 年度（２年目）

2 年目となる H28 年度では、研究協力保育施設が 5 箇所となり、臨床美術士が各園に日常的に勤務し、保育業務の補助を担当しつつ、子どもの感性や創造力を豊かに引き出すことを目的とした造形表現活動の実践を試行した。

多職種者による保育への協働実践のかたちは、保育士、臨床美術士、研究者の連携により構成され、日常的保育の中で、様々な表現活動が実施されている。大学研究者は、子どもの発達に沿った保育プログラムの開発に携わり、現場実践への支援、スーパーバイズを行い、定期的なカンファレンスや、職員研修等によって協働の効果的な方向性を検証している。（Fig.3）

Fig.3 協働実践のかたちづくり



各園では、常勤的に臨床美術士が配属されていることから、保育士と臨床美術士との連携が深まり、日々の活動や行事のための制作等を共に実践したり、各表現活動や展示へのアドバイスを行うなど、日常的な保育における協働の広がりを見せている。保育士の提案による園行事への協働、子どもが自主的に活動できるようなコーナー保育の環境づくり、保護者と園児の交流ワークショップ、高齢者施設への訪問する世代間交流活動へとその芽は育ち始めた。

保育士の意識調査からは、本研究の取り組みから 2 年を経て、様々な活動の蓄積により臨床美術へ対する理解や関心も高まっている。子どもたちが毎回様々な表現プロセスを体験することによって、個性溢れる作品を生み出している姿や、活動中や鑑賞会で、自他の表現を肯定的に評価する言葉がけなどから、子どもの変容を実感しており、臨床美術の方法論を吸収しながら保育士自らの感性や表現に関わる実践力を高めたいとの意欲も認められている。また日々の保育活動と関連付けながら各活動を繋ぎ合わせ、子どもの成長を総体的に捉えていきたいと協働に対する目的も自覚化され始めている。それぞれの専門性の価値観や視点の共有化や異質性について相互理解を深めながらも、子どもの生活を中心とした保育の質的向上を図るために、保育課程と関連も深めながら俯瞰的な視野に立ち、子どもの成長や表現力の伸長の

ために相応しい多職種協働のあり方について、次年度への発展的、継続的検証課題となった。

(3)平成 29 年度(3 年目)

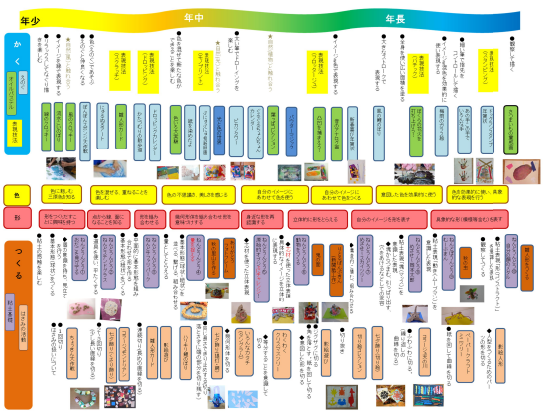
３年目である H29 年度は、協力施設が 7 施設となり、5 名の臨床美術士が各園に日常的に勤務し、保育業務の補助を担当しつつ、保育士との協働のもと、子どもの感性や創造力を豊かに引き出すことを目的とした造形表現活動の実践を試行した。

3 歳児～5 歳児それぞれのクラスに対して、原則月 3 回の活動内容の中に、領域的観点を盛り込みながら［オイルパステル］、［絵の具］、［ねんど］、［はさみ］、［デザイン・構成］、［行事制作］、［あそび・活動］といった表現技法ごとに発達段階を踏まえて分類した活動計画を立て、造形表現活動を長期的、俯瞰的な視点から構成した(Fig.4)。

それぞれの表現技法を用いた段階的、周期的な課題によって、経験の積み重ねが子どもの表現力を高め、より主体的で能動的な表現へと充実した内容となり、豊かな表現活動へと質の向上がみられた。

また、各園では、日々の活動や行事のため臨床美術士と保育士が協働により実践しており、保育士の提案による園行事への協働、子どもが自主的に活動できるようなコーナー保育の環境づくり、保護者と園児の交流ワークショップ等へと協働による有機的保育活動が発展しつつある。特にコーナー保育では、一斉活動で体験した造形表現の方法や技術を子どもがそれぞれ自己表現のツールとして体得し、自分なりの創造的活動へ展開していく力を培っていけるよう自主的な表現活動が可能な環境も整えられた。

Fig.4　子どもの発達に沿った年間造形活動



本研究協力施設の主に園長、主任、参加クラス(３～５歳児クラス)担任に対して、アンケート調査を行った。設問は、① 「保育における本実践の効果」、②「本研究導入以後の子どもの姿の変容」、③「保護者の反応や評価」、④「臨床美術士と保育士との協働の意義」とした。

①本実践の意義について、本活動では、美術の専門的知識や臨床美術によりこれまで培ってきた感性を豊かにする活動プロセスの活用により、様々な技法や教材、素材を用いて、子どもの発達に沿った活動内容を実施してきた。これらが保育現場での造形活動に対して刺激や効果として認められた（16%)。また、子どもの発想力(16%)や創造性、想像力を引き出す(10%)効果にもつながったと考えられる。更には鑑賞会を行い、個々の子どもの表現を認めながら、他児の表現への魅力にも着目し、認め合う心の芽生えに寄与したことも成果といえる。

②本実践によって認められた子どもの姿の変容について、造形表現活動への意欲の高まり(22%)が最も多く挙げられた。これらは、技法や素材もさることながら、興味関心が持てるテーマや導入方法、感性を刺激する活動、またきっかけとしての表現行為から主体的に個性を引き出す表現を援助する本アプローチの影響といえよう。また、鑑賞会により、他児の良いところを認め、お互い伝え合う姿も多々見られ(21%)、幼児期の社会性の芽生えの基盤作りに意義ある保育実践となっているといえる。更には、造形表現への苦手意識を持った子どももそうした意識を克服し、意欲的に表現活動へ参加できるようになったとの報告も挙がった。

③本活動に対する保護者の評価も概ね高く、興味や関心を持っていただけ、個性ある作品の展示や、保育参加、保護者会等で評価をいただいていると報告された。ただし、保護者の中には、そうした関心を持っていただける方と、関心のない方の理解差も生まれており、今後、どのように周知、理解を得ていくか課題となった。

④本研究の介入によって、保育士への様々な観点から刺激、学びとなっている(35%)。素材、技法、活動内容、また子どもの援助や声がけなど、日常的な保育内容へも吸収できる事が多々認められる。また、煩雑する保育業務の削減にも寄与しており、他職種である美術の専門職者が保育現場へ常駐する意味も大きい。協働への取り組みが一

歩ずつ展開されていくわけであるが、専門的であるがゆえの互いの障壁や、理解差、また保育内容を共有するためのミーティングの時間の確保等、様々な継続的な課題も残された。

（4）まとめ

本研究により、子どもの発達を踏まえた俯瞰的な造形表現プログラムの構造化について、1 モデルを提案することが出来た。また、保育現場に臨床美術士が常駐し、保育士とともに子どもの豊かな育ちを支えながら、大学研究者と共に取り組まれた多職種協働実践研究は、「子どもの育ち」を中心にして、互いの専門性の差異を明確に理解し、その上で、向かうべき保育の方向性や意義、価値を共有し、発展的、成長的に育んでいくことが出来た。その中で、それぞれの理念や目的を突き合わせて、更に保育内容を深めていくための課題もまだまだ多々あるといえる。本研究は、今後もこの活動を根付かせ、保育の質向上のための多職種協働のモデルとなるべく、継続的に取り組んでいくものとする。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者、研究協力者は下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1)保坂遊「臨床美術士に求められるもの/臨床美術士が求めるもの」臨床美術ジャーナル,6,1,2017,61-66

2）那須信樹「臨床美術は「主体的・対話的で深い学び」をもたらすか？～乳幼児のための新しい教育及び保育パラダイムの創造に向けて～」臨床美術ジャーナル,7,1,2018

3）和田明人・青木一則・河合規仁・寺澤三奈子「子どもの現場における臨床美術の新たな挑戦」臨床美術ジャーナル,7,1,2018

〔学会発表〕（計 15 件）

講演

1）那須信樹「臨床美術は「主体的・対話的で深い学び」をもたらすか？～乳幼児のための新しい教育及び保育パラダイムの創造に向けて～」臨床美術学会第 9 回基調講演,2017

シンポジウム

1)保坂遊「臨床美術士に求められるもの/臨床美術士が求めるもの」臨床美術学会第 8 回シンポジウム,2016

2）和田明人・青木一則・河合規仁・寺澤三奈子「子どもの現場における臨床美術の新たな展開」臨床美術学会第 9 回大会シンポジウム,2017

研究発表

1）保坂遊・和田明人・那須信樹・青木一則「臨床美術士と保育者による日常的造形活動実践モデルの開発１」、日本保育学会第 69 会大会（2016）

2）保坂遊・那須信樹「保育者と大学教員の協働による表現活動の充実へ向けた取り組み　子どもの豊かな感性を引き出す多職種連携のまなざし」、全国保育士養成協議会第 55 回大会,盛岡(2016)

3）保坂遊・和田明人・青木一則・河合規仁「子どもアートアプローチによる豊かな日常的保育実践への取り組み」、日本保健保育学会（2016）

4）保坂遊・那須信樹「保育者−学生−教員の協働によって紡ぐ子どもの豊かな表現活動-学生は子どもとの実践によって表現の本質的意義を学ぶ− 」、日本保育者養成教育学会（2017）

5）青木一則・和田明人・保坂遊・河合規仁「臨床美術士と保育者による日常的造形活動実践モデルの開発（２）−プログラム構成に関する考察-」、日本保育学会第 70 回大会

6）保坂遊・青木一則・和田明人・那須信樹・河合規仁「臨床美術士と保育者による日常的造形活動実践モデルの開発（３）−協働から広がる豊かな表現活動の試行− 」、日本保育学会第 70 回大会

7）杉山美濃里・青木一則・保坂遊「保育現場との協働で育む臨床美術の新しいカタチ（1）～あるてによって引き出される子どもの豊かな感性とその変容～」臨床美術学会第 9 回大会

8）寺澤三奈子・和田明人・保坂遊「保育現場との協働で育む臨床美術の新しいカタチ その２ ～臨床美術士が保育士と育むプロジェクト～」臨床美術学会第 9 回大会

9）髙木美紗・河合規仁・保坂遊「保育現場との協働で育む臨床美術の新しいカタチ その３ ～コーナー保育における自発的主体的活動の環境構成の試み～」臨床美術学会第 9 回大会

10）尾池舞子・和田明人・保坂遊「保育現場との協働で育む臨床美術の新しいカタチ その４−“あるて ”における保育者側の視点と課題−」臨床美術学会第9回大会

11）保坂遊・和田明人・青木一則・那須信樹「臨床美術士と保育者による日常的造形活動実践モデルの開発（４）−表現活動の充実を図る協働の様々なカタチ−」日本保育学会第 71 回大会

12) 青木一則・和田明人・上村裕樹・保坂遊「臨床美術士と保育者による日常的造形活動実践モデルの開発（５）−活動記録に見られる表現の捉え方に関する考察−」日本保育学会第 71 回大会

〔図書〕（計１件）
1)保坂遊・青木一則・和田明人・那須信樹・河合規仁「感じて　表現して　認め合う　こどもアートアプローチ　報告書」

６．研究組織
(1)研究代表者
保坂　遊　（HOSAKA,Yu）
東京家政大学・子ども学部・准教授
　研究者番号： 90423996
(2)研究分担者
青木　一則　（AOKI,Kazunori）
東北福祉大学・教育学部・准教授
 研究者番号：10382665
和田　明人　(WADA,Akihito)
東北福祉大学・教育学部・教授
　研究者番号：60231023
那須　信樹　(NASU,Nobuki)
中村学園大学・教授
　研究者番号：60300456
河合　規仁　(KAWAI,Norihito)
東北文教大学・人間科学部・教授
　研究者番号：80369264